

平成 28 年度～平成 30 年度「幼児教育の推進体制構築事業」最終報告書

調査研究テーマ	ア 幼稚園・保育所・認定こども園等を巡回して指導・助言等を行う「幼児教育アドバイザー」育成・配置に関する調査研究 イ 地域の幼児教育の拠点となる「幼児教育センター」の設置に関する調査研究（ア. の「幼児教育アドバイザー」の育成・配置を含めて調査研究を行うことも可能である。） ウ その他、幼児教育の質の向上を図るために必要な推進体制に関する調査研究
調査研究目的	乳幼児教育ビジョンにもとづき、さらなる乳幼児教育の質向上を図るため、家庭、地域、保育所・幼稚園、小・中学校等をコーディネート・サポートする拠点となる乳幼児教育センターの最適なあり方を研究するとともに、幼児教育アドバイザーに当たる乳幼児教育コーディネーター及び相談員を配置し、「乳幼児教育」「発達支援」の情報発信、研究、研修、連携等を実施する。
調査研究課題	幼稚園・保育所・認定こども園を通じた幼児教育の質の向上を図るための推進体制を構築し、幼稚園・保育所・認定こども園への指導のあり方、保幼小接続の課題へ対応するための、幼稚園・保育所と小学校双方での対応のあり方等に関する調査研究を行う。
実施期間	平成 28 年 5 月 6 日～平成 29 年 3 月 31 日 平成 29 年 6 月 1 日～平成 30 年 3 月 30 日 平成 30 年 5 月 8 日～平成 31 年 3 月 29 日
事業担当課	健康・子ども部 幼稚園・保育所課（乳幼児教育推進係）

【基礎情報】

① 規模			
人口	80,565 名（平成 31 年 3 月 1 日時点）		
② 幼児教育関連業務の担当部署			
担当部署	健康・子ども部 幼稚園・保育所課	業務内容（業務分担）	幼稚園・保育所の入所に関する業務、乳幼児教育に関する業務
一元化の有無	有	一元化の開始時期	平成 28 年 4 月
一元化した部局	市長部局		
③ 幼児教育センター（名称：舞鶴市乳幼児教育センター）（H30 年度）			
設置年度	平成 31 年度 4 月	設置形態	部署間連携
設置場所	現在は、舞鶴市役所 健康・子ども部 幼稚園保育所課内（平成 31 年度以降は舞鶴市立舞鶴こども園併設）	人数	6 名（うち、常勤 4 名、非常勤 2 名）
主な業務内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもを主体とした保育」「保幼小連携」「ドキュメンテーション」等について、「公開保育・授業」を中心に公私・園校種を越えて共に学ぶ「乳幼児教育の質の向上研修」や「発達支援に関する研修」を関係機関と連携しながら実施。 ・舞鶴市保幼小中接続カリキュラム「まいづるカリキュラム 015」の策定（平成 30 年度策定）と活用・研究。 ・講演会の開催、ニュースレターの発行、講座等で「乳幼児教育ビジョン」の周知。 ・園校への巡回、訪問（発達支援、乳幼児教育に関する）。 ・乳幼児教育フォーラム（報告会含む）の実施。 		
④ 幼児教育アドバイザー（H30 年度）			
名称	人数（単費内訳）	雇用形態	主な経歴
乳幼児教育コーディネーター	1 名（市）	正職	公立幼稚園副園長・市教育委員会幼児教育担当指導主事兼務、元公立保育所保育士
乳幼児教育相談員	1 名	非常勤職員	元公立保育所長・市保育所所管課長
発達（特別）支援教育相談員	1 名	非常勤職員	元小学校教諭・特別支援教育コーディネーター、こども発達支援施設巡回相談員
主な業務内容	<p>【乳幼児教育コーディネーター】担当課配属の公立保育士も含む</p> <ul style="list-style-type: none"> ○乳幼児教育～乳幼児教育の質の向上研修 保幼小中接続カリキュラム研究 他～ ・公開保育（保育所・幼稚園）→公開園に対する事前勉強会の実施、打ち合わせ、園訪問（指導案や環境等について相談、園内研修の実施）、指導者（大学研究者）との連絡・調整、当日の進行 ・研修（可視化・記録）→事例等の研修資料の準備、指導者との連絡・調整・当日の進行 ・保幼小連携公開保育・授業（保育所・幼稚園・小学校）→教育委員会と連携して実施、学校、園との調整、指導者との連絡・調整・当日の進行 		

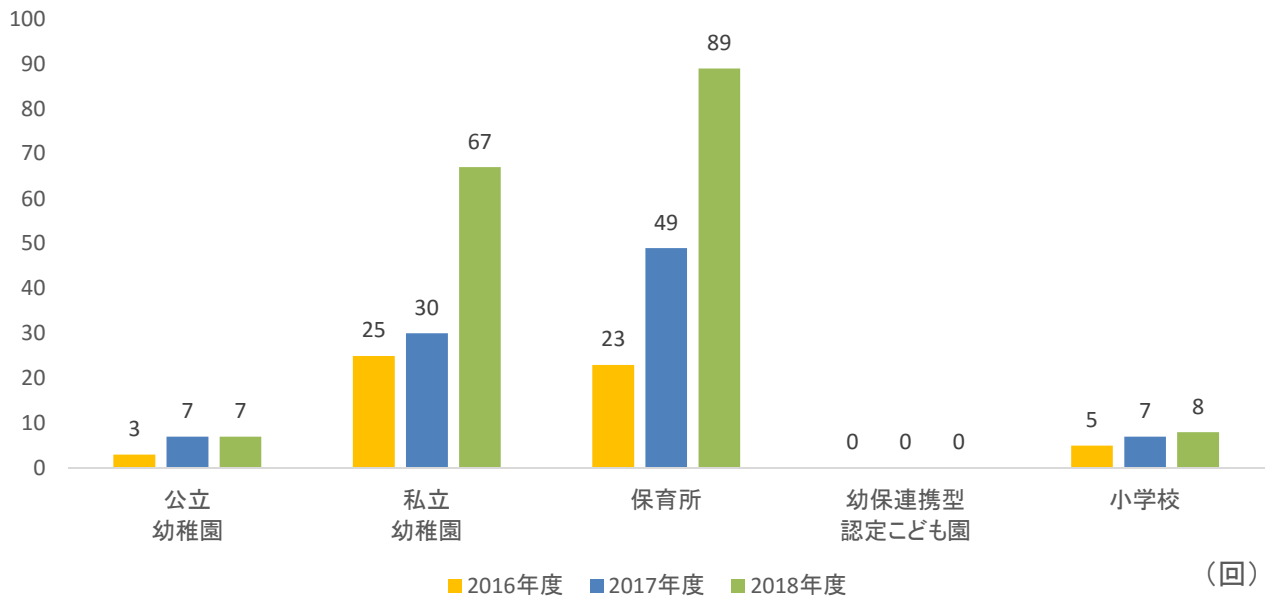
	<ul style="list-style-type: none"> ・保幼小中連携研修→教育委員会と連携して実施、指導者との連絡・調整・当日の進行 ・保幼小接続カリキュラム研究→教育委員会と連携して会議を運営、カリキュラム案の作成 ○発達支援 <ul style="list-style-type: none"> ・園巡回→園、関係機関との調整、巡回、意見書作成、園へ意見書報告 ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施 ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ ○その他 <ul style="list-style-type: none"> ・研修ニュースレターと報告書の編集・発行 ・講演会、乳幼児教育フォーラム（報告会等）の計画、準備、実施 【乳幼児教育相談員】 ○乳幼児教育 <ul style="list-style-type: none"> ・公開保育・研修の準備→案内、資料等の作成、印刷、参加者名簿作成等 ・記録等の整理→記録、写真、ビデオ、アンケート集計等 ・保幼小接続カリキュラム策定研究→会議の運営、カリキュラム案の作成 ○発達支援 <ul style="list-style-type: none"> ・園巡回→巡回、意見書作成、園へ意見書報告 ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施 ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ ○その他 <ul style="list-style-type: none"> ・研修ニュースレターと報告書の編集・発行 ・講演会、乳幼児教育フォーラム（報告会等）の計画、準備、実施 【発達（特別）支援教育相談員】 ○乳幼児教育 <ul style="list-style-type: none"> ・公開保育・研修の準備→案内、資料等の作成、印刷、参加者名簿作成等 ・記録等の整理→記録、写真、ビデオ、アンケート集計等 ・保幼小接続カリキュラム策定研究→会議の運営、カリキュラム案の作成 ○発達支援 <ul style="list-style-type: none"> ・園巡回→巡回、意見書作成、園へ意見書報告 ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施 ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ ○その他 <ul style="list-style-type: none"> ・講演会、乳幼児教育フォーラム（報告会等）の計画、準備、実施
--	---

派遣対象地域 市内全域

⑤ 全幼稚園数、認定こども園数、小学校数、保育所数（園）
 ※ 幼稚園・小学校：平成30年5月1日現在、認定こども園・保育所：平成30年4月1日

幼稚園			幼保連携型 認定こども園			保育所				地方裁量型 認定こども園		小学校	
うち、幼稚園型 認定こども園						うち、保育所型 認定こども園							
13園			園			15園				園		18校	
国	公	私	国	公	私	公	私	公	私	公	私	公	私
	1	12				3	12						

幼児教育アドバイザーの訪問回数(年間)



※ 公立幼稚園数には、国立と公立を含む。

【調査研究の目的、内容、成果及び今後の課題】

1. 事業受託前の取組状況

平成 27 年度「子ども・子育て支援新制度」スタートにあたり、舞鶴市は少子化に向かっており、量ではなく質を高める方向を目指すこととなる。市の特徴として、保育所・幼稚園共に私立園が多いことから、公私が一体となって質の向上に取り組む必要があった。保育所は、公私の保育者同士も、園と担当課（委託の関係上）とのつながりも深く、また、園数等の規模的にも質の向上と一緒に取り組みやすい環境にもあった。また、公立保育士が行政に入り、専門性をいかして子育て支援や発達支援に関わる部署で活動し始めたこともあり、市全体の子育てや保育の実態が見えるようになり、行政の専門職としてすべきことを模索してきたことから保育の質向上研修事業への展開へとつながった。

平成 22 年～24 年には「保小連携プログラム策定事業」と称し、モデル園となる保育所（5 歳児）と小学校（1 年生）とが連携活動を公開し、大学研究者に指導を受ける研修事業を実施した。その中で、幼児教育・保育（本市では乳幼児教育）をもう一度見直し、学ぶ必要があることに気付き、平成 25、26 年度「プロジェクト型保育推進事業～保育の質向上研修～」を実施した。「子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）」「可視化、記録（ドキュメンテーション）」「保幼小連携」をテーマに公開保育・カンファレンスやグループワーク等の研修、大学研究者の一貫した指導を受けるために、複数年、複数回関わってもらう等、平成 28 年度以降の質の向上研修のベースとなる内容（報告会、研修ニュースレター等を含めて）を確立した。

平成 27 年度には、文部科学省の調査委託事業を活用し、「幼児教育・保育の質向上推進事業」を実施する中で、学識経験者、市内の保育・教育関係者と PTA 代表、子育て支援関係者、市民等と共に乳幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や大切にしたいこと等、指針となる「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」を策定した。これを機に各園校の現場の保育者・教員も作業部会のメンバーとして策定に関わり、保幼小中の相互理解とつながりが構築された。また、平成 27 年 8 月には、教育振興大綱において「ふるさと舞鶴を愛し 夢に向かって将来を切り拓く子ども」を育てるため、「0 歳から 15 歳までの切れ目ない質の高い教育の充実」を基本理念に掲げ、「人格形成の基礎が培われる最も大切な時期である乳幼児教育の充実、小学校や中学校へつながる教育の充実」を図ることとなった。

これらを機に私立幼稚園との関わりもでき、平成 28 年 4 月には、保育所・幼稚園の担当課が一元化し、名実ともに園校種・公私を越えて乳幼児教育の質の向上に取り組むスタートラインに立つことになった。

2. 事業を受託した経緯

私立の幼稚園・保育所が大多数を占める本市の特徴を踏まえ、市が公私・園校種をつなぐ役割を担い、乳幼児教育の推進体制を構築するとともに、市民や地域の教育力向上に向けた情報発信等にも努める拠点となる「乳幼児教育センター」を、平成 31 年度に開設する公立幼保連携型認定こども園に併設し、各分野とパートナーとしてつながり共に学びながら各分野をつなげ（コーディネート）、支援（サポート）を行う「乳幼児教育コーディネーター」（アドバイザー）を配置し、市全体のさらなる質の向上を図るために、本事業を活用し効果的な研修方法や推進体制についての調査研究に取り組む必要があることから事業への応募に至った。

3. 調査研究の目的及び内容

(1) 目的

「乳幼児教育ビジョン」を推進し、さらなる乳幼児教育の質の向上を図るために、家庭、地域、保育所・幼稚園、小・中学校等をつなぎ支援する拠点となる乳幼児教育センターや、幼児教育アドバイザーに当たる乳幼児教育コーディネーターの充実が必要であることから、本調査研究に取り組むこととした。

(2) 内容

「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」に基づき、「乳幼児教育ビジョンの周知」「乳幼児教育の質の向上研修」「保幼小中接続カリキュラム策定研究」「乳幼児教育フォーラム」等の事業を実施し、事業を通して、その推進体制や効果的な研修方法等について調査研究を行った。また、乳幼児教育コーディネーターの役割、乳幼児教育センターの機能等についても研究を進めてきた。

4. 3 年間の取組・成果・課題

(1) 舞鶴市乳幼児教育の推進体制構築事業検討会議

取組

事業全体については、調査研究実行委員会（舞鶴市乳幼児教育の推進体制構築事業検討会議）の専門的知見及び保育・学校現場からの声による提案・見直し・検証により、効果的な調査研究を実施した。

成果

検討会議のメンバーの本事業に対する意見や助言が、「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」の周知や乳幼児教育センターの機能・役割・体制等の構築に活かされ、検討を進めることができ、以下のような意見をまとめることができた。

○乳幼児教育のビジョンの周知～保護者の意識改革、乳幼児教育への理解を深めることの必要性～

- ・保育所、幼稚園、小学校、中学校、それぞれの現場でやること、一体的に事業としてやれること、園校種を越えてやれること、市の役割としてやれるとことを明確にして、協力し、広報を充実させていく。
- ・子育て支援の場や保育所・幼稚園等で丁寧かつ地道に継続して保護者に伝えていく。
- ・小、中学校の教員からも 0 歳から 15 歳までの育ちや乳幼児期に大切にしたいことを発信していく。
- ・小、中学校で起こっている問題と乳幼児期の保育・教育がどう関係しているのか、調査・分析し、市が発信していく。

○0 歳から 15 歳までの切れ目ない教育の充実

- ・園校の多忙さ、人材不足などの事情もあるが、公私、園校種を越えた乳幼児教育の質の向上研修の継続と充実を図る。
- ・0 歳から 15 歳までをつなぐ「保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム 0 1 5～」の活用を推進する。

○乳幼児教育センターの役割、体制

- ・カリキュラムの開発、研究、研修、監査する機能を持たせる。
- ・アドバイザーの育成研修を受けた人が各園のアドバイザーとして活躍し、センターの事業もサポートしていく。

乳幼児教育センターは、子どもが誕生してから成人になるまでの次世代育成のうち、最も重要な乳幼児期の部分を担うセンターであり、教育委員会や小・中学校と連携し、その機能を最大限発揮し役割を果たしていく。

課題

この検討会議の機能が、来年度以降の乳幼児教育センターの運営や事業の内容等を決定していく運営委員会（仮称）として移行さ

せ、センターにより多くの関係者・団体が関わることで、市民全体の乳幼児教育センターとなるよう体制を構築する必要がある。

(2) 乳幼児教育センターの機能・役割

取組

市幼稚園・保育所課（乳幼児教育推進係）に乳幼児教育センターの機能を配置し、乳幼児教育ビジョンに基づき、『乳幼児教育』『発達支援』の分野において、「情報発信」「研究」「研修」「連携」に関する事業を企画・運営し、「コーディネート」「サポート」を行ってきた。1、2年目は、発達支援に関する園巡回や研修等を主管課である子ども支援課と、保幼小連携、保幼小接続カリキュラム研究等については教育委員会と、それぞれ連携して事業を進めてきた。3年目には、乳幼児教育センターの柱のひとつでもある『発達支援』を視野に入れ、発達支援に関する園巡回や研修等の事業を当課に移管し、『乳幼児教育』に関する事業と共に進めてきた。

【乳幼児教育】

大学研究者の指導を受けながら、「子どもを主体とした保育」「保幼小連携」「可視化・記録：ドキュメンテーション」等について、「公開保育・授業」を中心に公私・園校種を越えて共に学ぶ「乳幼児教育の質の向上研修」を実施した。研究指定園や効果的な研修方法についても公私の園と共に研究を進めてきた。また、「保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム015～」の策定に取り組んだ。

【発達支援】

本市では、「にじいろ個別支援システム」という発達支援に関する独自のシステムを構築しており、それに基づいて園巡回を実施した（園からの申請を受け、市内の発達支援に関する専門職で構成される個別支援検討会議のメンバーが園を巡回し、気になる子、障害のある子への支援方法や支援員の配置について指導・助言するもの）。また、関係機関と連携して、発達支援に関する研修を企画・実施した。

就園前の支援の必要な子と保護者の支援として集団生活育む場を設置・運営し、就園先へ支援方法等を引き継ぐ役割を担った。就園後にも社会性やコミュニケーションに支援の必要な子と保護者への支援として、小集団で社会性やコミュニケーション力を育む場を設置・運営し、在園先に引き継いでいく役割を担った。

成果

1年目の平成28年4月、市長部局に保育所と幼稚園の所管を一元化した幼稚園・保育所課を設け、さらに市長部局と教育委員会の連携を強化するため、保幼小中連携プロジェクトチームを設置するなど、公私・園校種を越えた体制ができた。特に、保幼小連携、保幼小中接続カリキュラムの研究・策定については、指導主事を中心に教育委員会と連携することで、保幼小連携の協力園・校において1年生と5歳児の連携活動が活発に行われるようになり、さらに保幼小中接続カリキュラムでは0歳から15歳までを見通したカリキュラムとなるなど、3年間で大きく進展した。

また、センター機能を有する乳幼児教育推進係においては、『乳幼児教育』『発達支援』の分野の「情報発信」「研究」「研修」「連携」に関する事業を企画・運営し、「コーディネート」「サポート」することができ、次年度の乳幼児教育センターの役割、体制確立などの具体化につながるものとなった。（事業終了後の展望に記載）

課題

○教育委員会との連携

平成31年度以降には、乳幼児教育センターが公立こども園に併設（庁舎内から移動）することから、教育委員会との連携の一層強化する必要がある。現在設置している保幼小中連携プロジェクトチームをどのように発展・機能させ、活用するのか、0歳から15歳までをどのようにつなぐのか、その体制等について検討する必要がある。

(3) 幼児教育アドバイザー（乳幼児教育コーディネーター）等の配置

取組

私立の保育所・幼稚園が大半を占めている現状を踏まえ、乳幼児教育ビジョンを策定（平成27年度）した際に構築した公私立・園校種を越えた連携体制を活用し、指導・助言するという立場ではなくパートナーとして、保育所・幼稚園等の研修や家庭・地域・学校との接続をサポートすると共に、相互の連携・調整等のコーディネートをする「乳幼児教育コーディネーター（＝アドバイザー）」（公立幼稚園副園長・市教育委員会幼児教育担当指導主事兼務、元公立保育所保育士）を1名配置している。

乳幼児教育コーディネーターについては、公私を問わず、保育所・幼稚園等の就学前の乳幼児教育施設を対象としており、教育委員会指導主事が対象としている公立学校（公立幼稚園）よりも広い範囲で活動している。

また、必要な知識を習得するため幼児教育指導者養成研修等への参加をはじめ、先進的な取り組みを行う園や行政への視察・交流、大学附属幼稚園の研究会への参加、学会・研究会での事業発表、本事業での研修実施や講師と各園とをつなぐ等の実践を通してさらなるスキルアップを図ってきた。

さらに、乳幼児教育コーディネーターを補佐し、子どもの発達の観点から保育所・幼稚園への巡回・助言や、家庭への発信等を行う乳幼児教育相談員1名及び発達（特別）支援教育相談員1名を配置した。

2年目より、次の「乳幼児教育コーディネーター（＝アドバイザー）」を育成する観点から、担当課に配属となった公立保育士と、3年目より、発達支援担当として配属となった公立保育士も含め「乳幼児教育」に関する研修等の事業や「発達支援」に関する巡回や研修も共に実施していく中で、育成を図ってきた。

なお、2年目以降は、公立保育所主任勉強会を継続し、乳幼児教育コーディネーターがアドバイス等をしなが、園内研修の方法や可視化の記録等の研究を進めるとともに、後進育成、保育リーダー育成も合わせて進めてきた。

①配置人数・②経歴

【平成28年度～】

・乳幼児教育コーディネーター：1名

（公立幼稚園副園長・市教育委員会幼児教育担当指導主事兼務、公立保育士）

・乳幼児教育相談員：1名

(元公立保育所長・市保育所所管課長)

- ・発達(特別)支援教育相談員：1名
- (元小学校教諭・特別支援教育コーディネーター、こども発達支援施設巡回相談員)

【平成29年度～】

- ・乳幼児教育担当(公立保育士)：1名

【平成30年度～】

- ・発達支援教育担当(公立保育士)：1名

③主な業務内容

【乳幼児教育コーディネーター】担当課配属の公立保育士も含む

○乳幼児教育～乳幼児教育の質の向上研修 保幼小中接続カリキュラム研究 他～

- ・公開保育(保育所・幼稚園)→公開園に対する事前勉強会の実施、打ち合わせ、園訪問(指導案や環境等について相談、園内研修の実施)、指導者(大学研究者)との連絡・調整、当日の進行
- ・研修(可視化・記録)→事例等の研修資料の準備、指導者との連絡・調整・当日の進行
- ・保幼小連携公開保育・授業(保育所・幼稚園・小学校)→教育委員会と連携して実施、学校、園との調整、指導者との連絡・調整・当日の進行
- ・保幼小中連携研修→教育委員会と連携して実施、指導者との連絡・調整・当日の進行
- ・保幼小接続カリキュラム研究→教育委員会と連携して会議を運営、カリキュラム案の作成

○発達支援

- ・園巡回→園、関係機関との調整、巡回、意見書作成、園へ意見書報告
- ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施
- ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ

○その他

- ・研修ニュースレターと報告書の編集・発行
- ・講演会、乳幼児教育フォーラム(報告会等)の計画、準備、実施

【乳幼児教育相談員】

○乳幼児教育

- ・公開保育・研修の準備→案内、資料等の作成、印刷、参加者名簿作成等
- ・記録等の整理→記録、写真、ビデオ、アンケート集計等
- ・保幼小接続カリキュラム策定研究→会議の運営、カリキュラム案の作成

○発達支援

- ・園巡回→巡回、意見書作成、園へ意見書報告
- ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施
- ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ

○その他

- ・研修ニュースレターと報告書の編集・発行
- ・講演会、乳幼児教育フォーラム(報告会等)の計画、準備、実施

【発達(特別)支援教育相談員】

○乳幼児教育

- ・公開保育・研修の準備→案内、資料等の作成、印刷、参加者名簿作成等
- ・記録等の整理→記録、写真、ビデオ、アンケート集計等
- ・保幼小接続カリキュラム策定研究→会議の運営、カリキュラム案の作成

○発達支援

- ・園巡回→巡回、意見書作成、園へ意見書報告
- ・発達支援に関する研修→関係機関と連携して企画、実施
- ・就園先への移行、支援→集団生活育みルームの実施、コミュニケーション育みルームの実施、園への引継ぎ

○その他

- ・講演会、乳幼児教育フォーラム(報告会等)の計画、準備、実施

④対象施設：市内保育所・幼稚園・小学校

⑤派遣期間：平成28年5月～平成31年3月

⑥派遣実績：

【平成28年度】

- ・園訪問：49回(発達支援に関わる園校巡回も含む)

【平成29年度】

- ・園校訪問(公開保育・授業に向けた事前勉強会、振り返り、聞き取り調査等)：29回
- ・発達支援に関わる園校巡回：51回
- ・保育リーダー、後進育成に関わる勉強会等：9回

【平成30年度】

- ・園校訪問(公開保育・授業に向けた事前勉強会、園内研修、振り返り等)：36回
- ・発達支援に関わる園校訪問：135回
- ・保育リーダー、後進育成に関わる勉強会等：4回

⑦派遣体制

【乳幼児教育】

- ・乳幼児教育コーディネーターと担当課配属の公立保育士
- ・幼児教育コーディネーターと学校教育課指導主事（保幼小連携研修に関して）
- ・乳幼児教育コーディネーター
- ・相談員

【発達支援】

- ・乳幼児教育コーディネーターと相談員
- ・相談員と担当課配属の公立保育士
- ・乳幼児教育コーディネーター
- ・相談員

成果

公開保育を実施する園に対しては、公開園同士の事前勉強会の実施や、訪問して保育や環境等への助言を行うことや、ドキュメンテーションや指導案の書き方等の園内研修などを実施し、公開園のサポートを行ってきた。公開保育をきっかけに乳幼児教育コーディネーターが園を訪問することは、園の現状や課題を知ることでもでき、また、園の保育者と意思疎通が図れ、アドバイス等もしやすくなり、サポートしていく上で大変有用であった。また、乳幼児教育コーディネーターや相談員が発達支援の園巡回にもあたることで、市内の多くの園の保育者とも面識ができるとともに、園の現状や課題がわかるといった効果もあり、園とのつながりがより深まっている。

平成 28 年度に公開保育を実施した私立保育園（さくら保育園）においては、複数回訪問し、信頼関係を築き、サポートした事例について記述する。

初めて公開保育を行うにあたり、園長をはじめ保育者は手探りの状態であり、園長を中心に毎回熱心に他園の公開保育に参加をし、また事前勉強会では公開を経験した園に熱心に質問するなど、保育を変えたいという熱い思いがあった。そうした熱い思いと、どうすればよいかかわからない不安があったこともあり、園長も保育者も乳幼児教育コーディネーターを頼りにしてくれる状況が生まれ、何度も園を訪問し、環境や保育、指導案に対して助言する機会を持つことができた。

そうした中で、保育者から、保育を変えようと試みているが、これでいいのか、どうしたらいいのか、以前の保育は間違っていたのか、といった迷いや不安の声が聞かれ、乳幼児教育コーディネーターは、その思いを受け止め、相談を受ける中で、保育者との信頼関係も深まるようになった。園に訪問すると、園長・副園長からも「保育者が聞きたいことがあると待っているから、各クラスをまわってほしい」と言われるようになり、各クラスをまわり、話を聞いたり、アドバイスしたり、丁寧に関わることもできた。発達支援の園巡回でも訪問する機会があり、園の子ども達の状況がわかることも、アドバイスする上で役に立った。

公開保育は 11 月であったが、保育を変えようと取り組み始めて半年、保育が変わり、子どもの姿が変わった。カンファレンスでも、大学研究者より「子ども達が自分達で決め、自分達で遊びをつくっている。まさにプロジェクト型保育。乳児クラスの環境の工夫、幼児と保育者と一緒つくる環境、3 歳児はイメージ豊かなごっこ遊び、4、5 歳児は少人数グループでの協同的な遊びが見られる」等、評価の言葉をもらい、保育を変えてきたことへの成果を感じられる機会となった。

公開保育の数日後には、園の保育者一人ひとりから、乳幼児教育コーディネーター宛てに、「公開保育の前にお話を聞いてもらうことができ、良いアドバイスもいただけて安心して臨むことができてありがたかった」「環境設定や指導案の書き方を教えてもらって助かった、肯定的に言ってもらえて自信もついた」「これでよいのか、どうすれば？と答えが出ないままだったことが背中を押していただき、何より嬉しくもあり安心できた」といった内容の感謝の手紙をいただいた。公開保育後もドキュメンテーションの園内研修に伺い、アドバイスする機会もあり、現在も、園に訪問すると園長や保育者から、保育の相談を受けることがある。保育を変えたい、学びたいという思いがあれば、公私、園種関係なく変わることができ、乳幼児教育コーディネーターがそのサポートをすることも可能になってくる。しかし、園長の理解がなければ、園に訪問することも、クラスに入ることも難しくなることから、園長の理解は不可欠であると感じた。

また、公開保育当日の園長のあいさつでも「公開保育はきっかけであり、スタートに立ったところ、まだ、発展途上である」との発言があり、公開保育後の現在も、保護者への発信や行事の改革等に取り組まれている。

平成 29 年に実施した公開保育実施園の聞き取り調査からは、公開保育後の保育の変化が伺えた。「子どもが自分で考えて行動するようになった」「作品も自分で選んで考えて作るので発想が豊か」「材料の使い方や道具の使い方も考えている」と子どもの変化を感じている。また、園では発表会を子どもを主体とした内容に変え取り組む中で、保育者はやりたいこと、得意なことをいかした劇をと考え、自分で役割を選び、セリフや音響、道具、衣装、幕引きまでほとんどを子ども達自身で行うことができた。初めは保護者の反応も不安だったが、事前におたよりや帳面でプロセスを伝えていたことあり、「ふだんの遊びが発表会として見られた」といった感想も聞かれた。また、園での遊びを子ども達がよく伝えていることもわかった。

同様に、平成 30 年度に実施した保護者アンケート調査からも、保育の変化がわかる結果となった。

※（6）評価【保護者アンケート調査】に記載

上記の以外の公開園への振り返りからも、乳幼児教育コーディネーターや乳幼児教育センターのバックアップについて、園に何度も来ていただき、指導案作成の指導、環境面においても違う視点からアドバイスしてもらい、学ぶことも多くあった、わかりやすいお話と的確な助言でとても心強く感じられた、何度も遅くまで相談にのってもらいありがたかった、といった内容の意見をいただくことができた。乳幼児教育センターの役割である「コーディネーター」「サポート」につながった。

また、参加者アンケート（平成 29 年 7 月 24 日実施、平成 30 年 6 月 22 日実施：保育リーダー向け）の中で、園内研修の実施する際に「乳幼児教育コーディネーターに依頼したい」という回答（約 30%）もあり、平成 30 年度からは、依頼のあった園の園内研修に参加し、ドキュメンテーションの事例検討等の研修を実施することができた（私立幼稚園 1 園）。園の保育者からは園に見に来てほしい、アドバイスをしてほしいという希望も出てくるようになり、乳幼児教育コーディネーターという存在が浸透してきている。

2 年目には、乳幼児教育コーディネーターが幼児教育指導者研修会への参加し、指針・要領の改訂の理解を深め、研修の方法等を学び、全国の幼児教育に関わる指導者とも交流を持つことができ、全国にネットワークができたことも大きな成果である。また、学んだことや全国の取り組みなど本市の研修等にいかすこともでき、スキルアップを図る機会となった。

課題

乳幼児教育コーディネーターとして、園のサポートを行うためには、その専門性の確保が重要であり、大学や大学院、国立教育政策

研究所幼児教育研究センター等での研修受講及び認定又は資格取得等によるアドバイザーの専門職としての位置づけを行うこと（保育士等キャリアパス等の講師として位置づけも含めて）が必要である。併せて、後進育成も重要であるが、全国的な保育者不足の中、育成のための体制や手法も課題である。

（４）乳幼児教育ビジョンの周知

取組

乳幼児教育の質向上に密接に関わる保護者や地域の方々への理解を得るため、乳幼児期に大切にしたいこと等を明記した「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」の内容について、講演会や広報誌等による情報発信を行ってきた。また、子育て世代へ周知を図るため、公民館や子育て支援基幹センターでの子育て講座や主任児童委員研修において「乳幼児教育ビジョン」の内容の説明を行った。

【平成 28 年度】

講演会：2 回 ビジョン説明会：2 回 小学校授業：1 回 FMまいづる出演：2 回

広報まいづる掲載：1 回

【平成 29 年度】

講演会：2 回 FMまいづる出演：1 回

【平成 30 年度】

講演会：2 回 民生児童委員（主任児童委員）研修会：1 回 子育て支援基幹センター：1 回

成果

乳幼児教育の質向上に取り組まれている園校をサポートするためにも、保護者をはじめとする市民向けの情報発信に力を入れてきた。広報誌（平成 28 年 12 月号）では 10 ページに及ぶ特集を組むことができ、公開保育を行った園長から「子どもを主体とした保育に取り組む、その良さは子どもの姿を通して感じているが、保護者にうまく伝わるかが心配だった。広報誌を見た保護者から、こういうことだったのですねと理解を示してもらえたり、良いことをやっているねと声をかけてもらえたりした。広報誌はありがたかった。」との意見が寄せられた。

平成 30 年 8 月には、子育て支援基幹センター主催の「学びのひろば」において、子育て中の保護者の方々に乳幼児教育ビジョンについて写真やドキュメンテーションを使って説明することができた。参加した方々からは、0 歳から 6 歳までの子育てについて必要なことが聞けてよかった、園の普段の様子だったのでわかりやすかった。発達や年齢による関わり方を教えてもらって参考になった、といった感想も聞かれ、ドキュメンテーションを活用して、具体的にわかりやすく伝えることが有効であることも実感できた。

課題

保育所・幼稚園で「乳幼児教育ビジョン」に基づき乳幼児教育の質の向上に向けて取り組んでいても、保護者の理解が無ければ保育を変えることは難しいといった声（舞鶴市乳幼児教育の推進体制構築事業検討会議のメンバーより）もある中で、「乳幼児教育ビジョン」の周知は大きな課題と言える。市として、園校をサポートする上でも市民への周知・啓発は急務である。園では、保育を可視化したドキュメンテーション等を通じて、乳幼児教育センターにおいても講演会、子育て講座、ホームページ等を通じて発信していく必要がある。特に、子育て世代への周知を図るため、子育て支援基幹センター等の関係機関と連携を強化し、丁寧な周知・説明の場を設ける必要がある。

（５）乳幼児教育の質の向上研修

取組

乳幼児教育ビジョンに基づき、保育所・幼稚園・小学校等に対しては、「子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）」「可視化・記録：ドキュメンテーション」「保幼小連携」等について「公開保育・授業」を中心に公私、園校種を越えて共に学ぶ「乳幼児教育の質の向上研修」を実施した。現地研修として大学附属幼稚園の研究会への参加、また、研修に参加できなかった保育者・教員に対する学びの発信や参加者の学びの振り返りとして研修ニュースレターの発行や報告会（乳幼児教育フォーラム内）も実施した。その中で、研修の内容や手法についての研究に取り組んだ。

①子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）

【公開保育 カンファレンス グループワーク】

- ・公開園に対しては、指導案、ドキュメンテーション等の事前勉強会（2 回程度）を実施し、指導案の作成、保育や環境の見直し等の園内研修を実施した。2 年目からは、乳幼児教育の質の向上という大きな目的だけでなく、園の保育を見直し、変えていくという意識を明確にするため、公開保育の研究テーマ（園の目指すべき保育、方針）と視点（見てほしい、学びたい視点）について園の保育者と検討した。
- ・カンファレンスでは、大学研究者による指導・助言をメインにしてきたが、地域の中で保育を担う保育者同士が同僚性を築いていくためにも、実践者と参加者が保育を語り合うグループワークを 2 年目以降に取り入れた。
- ・参加者に対しては、保育を見とる視点を明確化するために、指導案を事前に配布し、当日には、研究テーマや視点を共有し、視点にもとづいて子どもの姿等を記録してもらい、グループワークで共有した。公開後のグループワークやカンファレンスでの大学研究者による指導・助言を受け、実践者も参加者も学び合えるよう取り組んだ。
- ・今後の公開保育の手法を検討する上で、3 年目には、研究指定園（私立幼稚園）を 1 園指定し、年間を通じて大学講師等による園指導を受け（4 回）、その研究成果を公開保育等において報告する取り組みを実施した。

平成 28 年度：5（私立保育園 2 公立保育所 1 私立幼稚園 1 公立幼稚園 1）

平成 29 年度：4（私立保育園 2 公立保育所 1 私立幼稚園 1）

平成 30 年度：4（私立保育園 3）

〃 研究指定園：1（私立幼稚園）

②可視化・記録：ドキュメンテーション

各園で書いているドキュメンテーションをもとに、ドキュメンテーションを見とる視点となるワークシートを活用してグループ内で

の検討や、ドキュメンテーションの中の遊びや保育について語り合う研修を実施した。

2年目以降は、経験年数に合わせて対象、内容を分けることとした。新任及びドキュメンテーションを初めて書く保育者を対象に、事例をもとにドキュメンテーションをグループごとに作成する「フレッシュ」向け研修と、保育リーダー（特に役職、経験年数等の条件はつけず、園の判断に任せる）を対象に、ワークシートを使ってドキュメンテーションを検討するグループワークを体験しながら、園内研修として活用する内容を学ぶ「保育リーダー」向け研修を実施した。

- ・参加型のグループワークを中心とし、4～5人の小グループにし発言しやすくする、また、ドキュメンテーションを書いた保育者がグループに入り参加者と一緒に検討する、さらに、現在担任している年齢ごとにグループを構成するなどの工夫を行った。
- ・ドキュメンテーション（保育）の中にある育ちや学びを「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」で見とる内容も取り入れた。

年間：4～5回実施

③保幼小連携

保幼小連携研修においては、教育委員会の指導主事と連携して事業を企画し、生活科を中心に連携を行う連携協力園・校を指定し、保育所・幼稚園の5歳児と小学校の1年生の担任を対象とした「計画・実践（公開）・評価」の連続研修とし、年間を通して連携を行えるように工夫した。また担当者だけでなく園・校全体の認識が必要であることから、1年目には園長や校長をはじめとした全体向け講演会を併せて開催した。

実践（公開）では、公開保育・授業を実施し、カンファレンスにおいて大学研究者の指導・助言を受け、実践者も参加者も学び合う研修とした。また、公開園・校には、事前打ち合わせ等に教育委員会指導主事と乳幼児教育コーディネーターが入り、連携活動や指導案についてアドバイスをを行った。

平成28年度：3回（内1回は連携活動の公開保育・授業 小学校1 公立保育所1 私立幼稚園1）
 平成29年度：3回（内1回は連携活動の公開保育・授業 小学校1 私立保育所1 私立幼稚園1）
 平成30年度：3回（内1回は連携活動の公開保育・授業 小学校1 私立保育所1 私立幼稚園1）

④その他

現地研修：神戸大学附属幼稚園研究会2回 鳴門教育大学附属幼稚園2回 その他1回
 研修ニュースレター：平成28年度9回 平成29年度10回 平成30年度8回 発行
 報告会 年：1回（平成29、30年度は乳幼児教育フォーラム内で報告会実施）

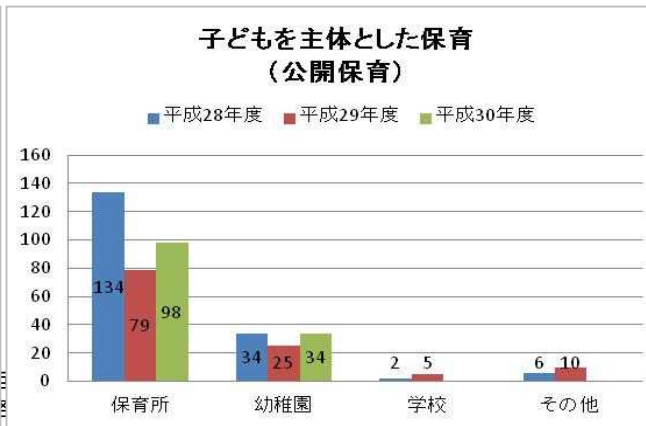
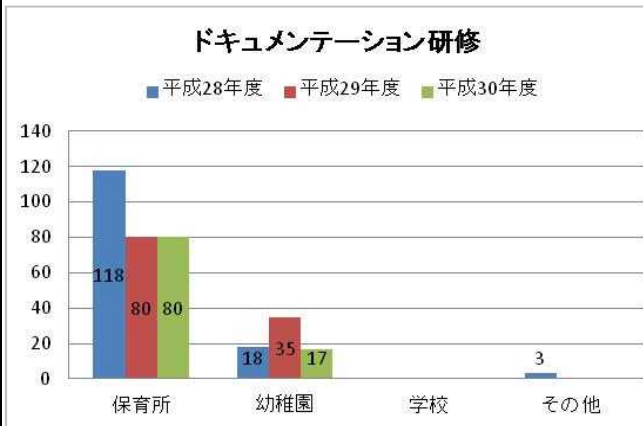
成果

【参加状況】

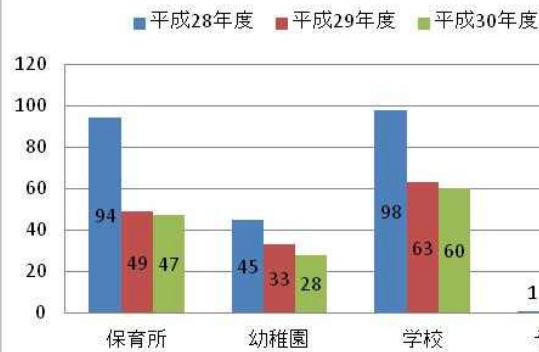
保育所においては、「子どもを主体とした保育」の公開保育は、15園中8園、「保幼小連携」の公開保育・授業は3園が実施。前事業（平成25、26年度）においても公開保育に取り組んでいる保育所を含めると、1園を除いて14園（複数回実施している園もある）が公開をしていることとなり、公開保育が浸透して来ている。幼稚園においては、「子どもを主体とした保育」の公開保育は12園中3園、「保幼小連携」の公開保育・授業は3園（内1園は「子どもを主体とした保育」の公開園）が実施。12園中5園が公開しており、公開保育が浸透しつつある。

参加人数に関しては、下記のグラフのとおりとなっている。

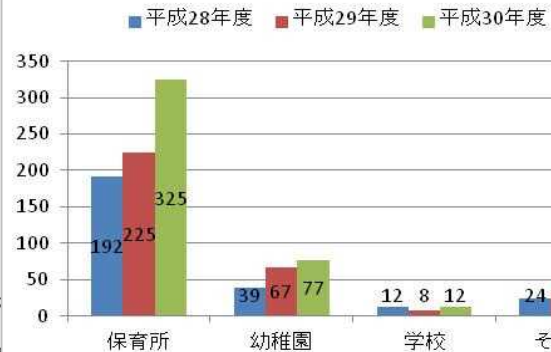
（平成31年3月現在：保育所15、幼稚園13、小学校18、中学校7）



保幼小連携



講演会・乳幼児教育フォーラム



どの研修も、保育所の参加が多く、幼稚園の参加は少ない傾向にある。保育所は、平成22年度より保育の質の向上に向けた取り組みを実施しており、積み重ねの効果や保育士等キャリアアップ研修に対応している効果もあると言える。

幼稚園は、本事業から本格的に参加しており、積み重ねがないことや園の建学の精神や独自性が優先され、他園の保育から学ぶという姿勢も少ないように感じる。

また、平成30年度は、私立幼稚園協会の保育者としての資質向上研修俯瞰図の研修にも位置付けているにも関わらず、その効果は見られていない。

しかし、公開保育等に参加するためには、代替の保育者が必要となり、人員の少ない園（特に定員に満たない園）は参加しにくい状況にある。平成29年度の夏休みに開催したドキュメンテーション研修（平成28年7月24日保育リーダー向け）は参加者の半数が幼稚園だったことから、通常保育期間中には研修に参加する体制がないことも一因と言えるのではないかと考える。同様に、保育所でも人材不足は顕著であり、質の維持・向上のためには人材確保と育成が急務である。

しかし、講演会や報告会を含む乳幼児教育フォーラムは、参加しやすい土曜日開催としているにも関わらず、同様の結果になっていることから、乳幼児教育の質の向上に関しては、保育所の方が関心は高いと言える。

学校については、保幼小連携に関する研修は、全小学校が参加している半面、乳幼児教育に関する講演会や乳幼児教育フォーラムへの参加は少しずつ増えてきてはいるが、まだまだ、関心は低いと言える。

本市の現状から考えると、約半数を占める私立幼稚園や多くの子ども達が通う公立学校に乳幼児教育に関心を持ってもらい、理解を深めていくことが必要であると感じている。

① 子どもを主体とした保育（プロジェクト型保育）

【公開保育 カンファレンス グループワーク】

○公開保育

（平成28、29、30年度参加者アンケート、平成29年度公開園への聞き取り調査より）

保育所に関しては、着実に公開保育という文化が根づいてきており、3年目には、今まで研修への参加に消極的だった私立保育所が2園、公開保育を実施することができた。

公開保育の効果は、公開園への聞き取り等からも、「保育を見直す、振り返るきっかけになった」「環境や関わりを意識するようになった」「子どもを見る意識が変わった」「園外の人に客観的に見てもらうことは大事」「保育者同士で保育について話し合う機会が増えた」といった声が聞かれ、直接、園の保育を振り返るきっかけとなり、保育の見直しと変革につながっていると見える。

ある園では、他園の公開保育に参加する中で、自園の子ども達が自分で考えるというよりも指示待ちであることに気が付き、どうすれば、子どもが自分で考え行動できるのか、主体性が育つのかといったことから保育者間で話し合いが始まり、まず、環境から見直すことになった。

始めは、保育者が考えた環境だったこともあり、継続しなかったり、玩具の取り合いになったりすることがあったが、そののち、子どもの好きな遊びや興味・関心が見えるようになってくると、それに合わせた環境を整えることができるようになり、子ども自身にも、遊び込む、友達同士で関わるといった姿が見られるようになってくる。保育者自身も保育が楽しくなり、もっと、遊びが楽しくなり、継続していくよう工夫するようになってくる。遊びが、行事で途切れないようにならないか、遊びと行事をつなげていきたいといった意見も出てくるようになった。こうした好循環が保育を変えていく原動力となっていくのではないかと考える。

どの公開園にも共通することは、保育（主に環境）の見直しと保育者間の話し合いである。環境を変えることで子どもの姿が変わり、保育者が変わっていく。保育者が主体的に保育を考えること、保育者間で共有すること（話し合う）ことが、公開保育をきっかけに各園で広がりつつある。

この他にも、他園の公開保育にもっと参加して学びたいといった意見やドキュメンテーションやクラスだより等の記録は学んできたが、指導案はあまり意識できていなかったため、記録をいかした計画（指導案）についても学んでいきたい、といった意見も聞かれた。また、保育を見直す時に第三者からの視点も重要であり、公開保育前に乳幼児教育コーディネーターが訪問し、保育や環境等に対してアドバイスをしたことが有効であったといった意見もいただくことができた。

○グループワーク カンファレンス（平成29、30年度の参加者アンケートより）

カンファレンスでは、大学研究者からの指導を実践者も参加者も一緒に聞くことで、「公開園へのアドバイスは、自園でもいかせることが多かった」「すぐ実践したい」「保育を改めて考える良い機会となる」「環境や教材の工夫が見られてよかった」といった意見が聞かれ、自分の保育を振り返ったり、新たに取り入れたりする機会となっていることが伺える。

2年目から参加者の意見が聞きたいという公開園からの要望もあり、また、同じ地域の保育者同士同僚性を築くという意味でも、参加者と実践者が一緒に保育を語り合うグループワークを取り入れた。参加者アンケートからは「園の先生の思いや考えがよくわかった」「少人数でのグループワークで質問に丁寧に答えてもらえてよかった」という意見があり、保育について意見交換がされていたことがわかる。

参加者の保育を見とる力を育成するため実施している「子どもの姿の記録」や「公開保育の研究テーマ・視点」についても、研究を重ね、3年目には一定の成果もあった。ある公開園では、「環境と子どもの姿」「子ども同士の関係性（関わる姿、言葉など）」「保育者の関わりと子どもの姿」の3つの視点から1つを選び記録し、グループワークの中で共有し、視点について協議した。参加者アンケートからは「3つの視点からグループを分け、グループごとの発表もあったので、わかりやすかった」「グループワークの視点が定まっていることで学びも深まった。見る方もポイントが絞れた」といった意見が聞かれ、視点を明確化し、参加者自身が視点を選び、それにもとづいて保育を見とり、語り、深めることができるといった効果が得られた。また、「保育を語り合うことで（自分の表現力、説明力も含め）より一層具体的な学びにつながる」「自分の視点と他の先生が見る視点は違い、共有できてよかった」といった意見も聞かれ、4～5人の少人数のグループに公開園の保育者も加わり、互いに保育を語り合う中で同僚性を高めるといった効果もあった。

【研修指定園】

年間を通じて、指導者が園を訪問し、保育や環境、記録等への指導・助言を行うことができた。公開保育は、その日の保育だけになりがちであるが、研究指定園では、約2～3か月ごとに訪問し、その時々の保育に対して指導・助言を受けることが可能になり、年間を通じて保育の見直しをしながら、継続していく効果が期待される。

研究指定園の保育者の振り返りでは、子どもが自ら好きな遊びを見つけられる環境と遊び込める空間を整えることで、子どもの自己発揮する姿、友達を認め合う姿が見られ、保育者も子どもの興味・関心が見とれるようになり、子どもたちと一緒に環境を工夫していく中で遊びが展開していくようになった等、保育内容や子どもや保育者の変化に対する意見が聞かれた。

私立幼稚園の参加が難しい中で、1年間研究指定園として取り組み、こうした変化が見られたことは意義があったと言える。

② 可視化・記録：ドキュメンテーション（平成29年度 参加者アンケートより）

自分の書いたドキュメンテーションを持ち寄り、少人数で検討するグループワークを取り入れた。参加者のアンケートからは①自分には見えなかった気づきやいろいろな考えに触れることができた、新たな発見があった②自分の保育を振り返り、見直す機会になった、これからの保育につなげたい、といった回答が約8割あったことから、ドキュメンテーションの中ではあるが、保育を検討し、語り合う効果が見られた。

実施日：平成29年10月11日(水)、11月8日(水)

内容：

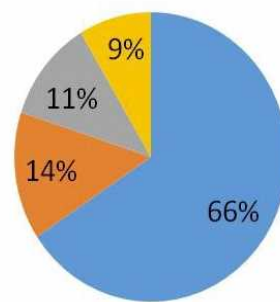
- 1 グループワーク「ワークシートの視点をもとにドキュメンテーションをみとる」
 - ◎ドキュメンテーションを読み、自分なりにワークシート（ドキュメンテーションを書く時の視点）をもとに見とる
 - ◎4～5人のグループで事例を検討する
- 2 グループワーク報告
- 3 講義 指導・助言

参加：32名

回答：32名（回答率100%）

※結果については、アンケートが自由記述によるものであり、その回答を大まかな傾向としてまとめたものである

ドキュメンテーション研修
～グループワーク～



- ①自分には見えなかった気づきやいろいろな考えに触れることができた、新たな発見がある
- ②自分の保育を振り返り、見直す機会になる、これからの保育につなげたい
- ③グループワークの方法がよかった
- ④その他

【経験年数に応じた研修】

○フレッシュ向け（平成29年度 参加者アンケートより）

経験年数の浅い保育者を対象にしたフレッシュ向け研修では、4～5人のグループで事例をもとにドキュメンテーションを書くグループワークを実施したが、①みんなで書くと、意見、アイデア、いろいろな考えがあることがわかる、楽しい、学べるといった意見が約50%を占め、グループワークを通していろいろな保育の見方、考え方、アイデア等に出会うことができ、保育の引き出し（方法）を増やすことにつながっていると言える。しかし、④難しいと感じるの中には、「楽しいけれど、難しい」「学び、育ちがどこにあるのか難しい、きっかけは何か、保育者の意図は、など多くのことを整理して書くのが難しい」といった回答もあり、自分の保育を記録し、振り返ることそのものの経験が少ないのではないかと考える。その経験も研修等で積み重ねていく必要があると言える。フレッシュな保育者の経験が少ないことからくる不安や迷い等を、研修を通じて保育の引き出し（経験値）を増やすことで解消し、園は違っても同じ市の中で共に保育する者同士の同僚性を高めていく機会になっているのではないかと考える。複数回実施することができれば更に効果があると思われる。

実施日：平成29年6月23日(金)

内容：講義「ドキュメンテーションとは」

グループワーク「事例をもとにドキュメンテーションを作成しよう」

◎事例を読み、自分なりワークシート（ドキュメンテーションを書く時の視点）をもとに分ける

◎4～5人のグループでドキュメンテーションを作成する

◎他のグループのドキュメンテーションを見る

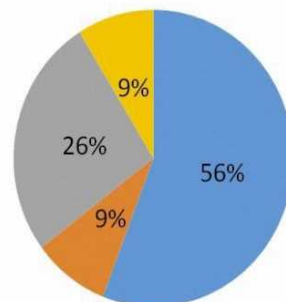
◎指導・助言

参加：32名

回答：31名（回答率97%）

※結果については、アンケートが自由記述によるものであり、その回答を大まかな傾向としてまとめたものである

ドキュメンテーション研修(フレッシュ向け)
グループワーク～書いてみてどうだったか？～



- ①みんなで書くと意見、アイデア、いろいろな考えがあることがわかる、楽しい、学べる
- ②書き方のポイント、工夫がわかった
- ③園でもやってみたい、書いてみたい
- ④難しいと感じる

○保育リーダー向け（平成 29、30 年度 参加者アンケートより）

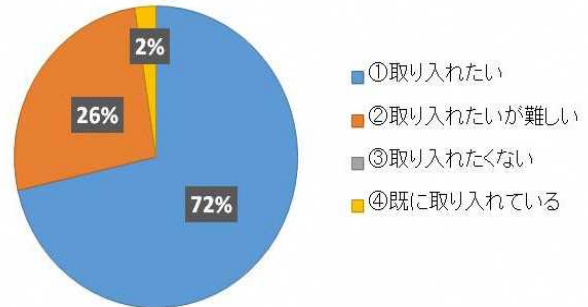
参加者アンケートから、研修で経験した「グループワークを園内研修として取り入れたいか」という質問に対しては、昨年度は、72%が①取り入れたいと回答しているが、今年度は42%に留まっている。しかし、今年度は④すでに取り組んでいる園が23%と昨年度の2%から大幅に増加していることから、園内研修が充実しつつあることが伺える。

実施日：平成 29 年 7 月 24 日（月）

内容：

- 1 グループワーク「ワークシートの視点をもとに事例をみとる」
 - ◎グループワークの目的・方法について説明
 - ◎事例を読み、自分なりにワークシート（ドキュメンテーションを書く時の視点）をもとに見とる
 - ◎4～5 人のグループで事例を検討する
 - 2 講義「ドキュメンテーションの中の保育を幼児期の終わりまでに育てほしい 10 の姿でとらえる」
 - 3 グループワーク「事例の中の育ちと学びを 10 の姿でみとる」
 - ◎事例を読み、自分なりにワークシート（ドキュメンテーションを書く時の視点）をもとに見とる
 - ◎4～5 人のグループで事例を検討する
 - 4 指導・助言
- 参加：53 名
回答 46 名（回答率 87%）

ドキュメンテーション研修（保育リーダー向け）
～グループワークを園内研修に取り入れたいか～

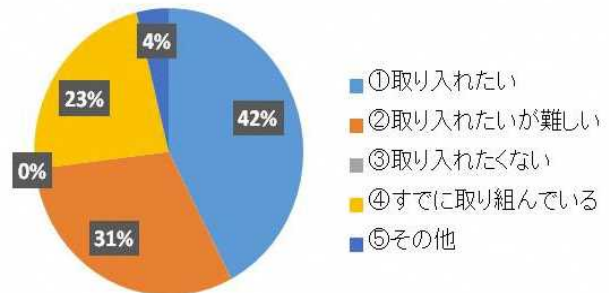


実施日：平成 30 年 6 月 22 日

内容：

- 1 グループワーク「ワークシートの視点をもとに事例をみとる」（乳児・幼児）
 - ※グループワークのファシリテーターを体験する
 - ◎グループワークの目的・方法について説明
 - ◎事例を読み、自分なりにワークシート（ドキュメンテーションを書く時の視点）をもとに見とる
 - ◎4～5 人のグループで事例を検討する
 - ◎グループワークの振り返り
 - 2 講義「園内研修とマネジメントについて」
- 参加：26 名
回答：26 名（回答率 100%）

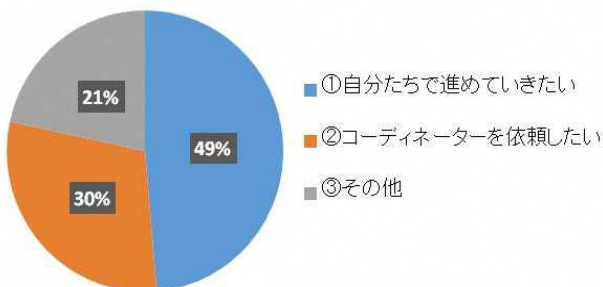
グループワークを園内研修に取り入れたいか？



自園で「園内研修をどのような形で進めていきたいか」という質問に

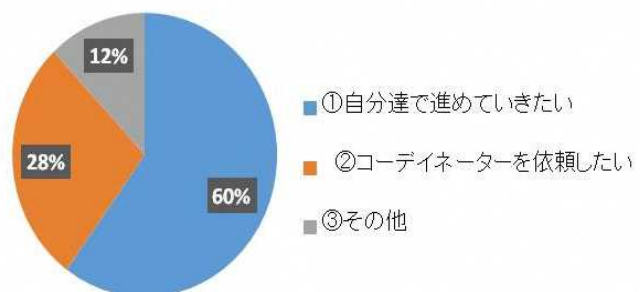
答えていることから、上記と同様のことが言える。しかし、②乳幼児教育コーディネーターを依頼したいといった回答は、昨年度も今年度もほぼ変化が無いことから、昨年度課題となっていた乳幼児教育コーディネーターによる園訪問等のサポートができていないことが一因ではないかと思われる。平成 30 年度には、参加者アンケートの回答に依頼したいと回答した園へ、1 園（私立幼稚園）ではあったが、園内研修のサポートをすることができた。

ドキュメンテーション研修（保育リーダー向け）
～園内研修をどのような形で進めたいか～

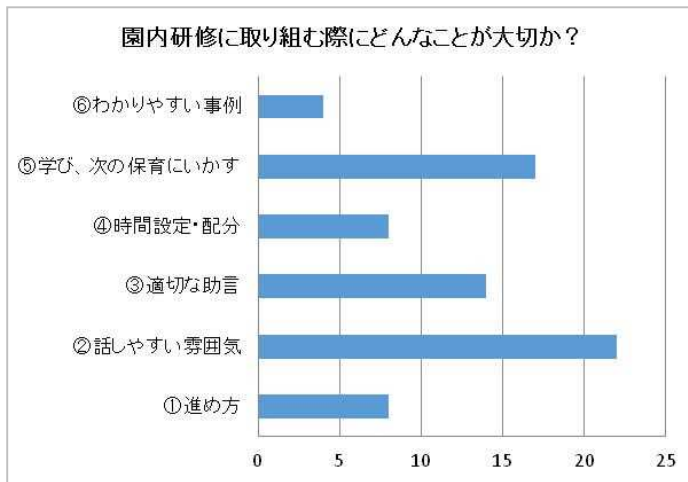


平成 29 年 7 月 24 日 参加者アンケートより

園内研修を取り組む際にどのような形で進めたいか？



平成 30 年 6 月 22 日 参加者アンケートより



平成 30 年 6 月 22 日 参加者アンケートより

「園内研修に取り組む際、どんなことが大切か」（複数回答可）といった質問に対しては、②話しやすい雰囲気といった回答が多く、また、「若い先生はなかなか意見を言えないので、小グループですると言いやすい。」「よく聞く、否定しないということを守ると言いやすい」といった記述があった。グループワークを園内研修として取り入れるには、保育リーダー自身の園内研修に対するマネジメント力やファシリテーション力も必要である。保育リーダー向けの研修方法やマネジメントに関する研修や乳幼児教育コーディネーターが園訪問等でサポートしていくことも必要と考える。

③保幼小連携（平成 29 年度 小学校教員への聞き取り調査より）

教育委員会との連携で、市内全域で協力園・校が指定されたことで、どの園校でも連携活動を実施されるようになってきたことが大きな成果である。その連携活動の内容については、充実したものとなるように、保幼小連携研修において、大学研究者より講義、指導・助言を受けられるようにしてきた。研修は、1、2年生と5歳児の担任を対象とし、連携活動の指導案の作成、実践、記録を通じての振り返りという実践のPDCAサイクルとなっており、より効果的な研修となっている。参加者は、その年ごとに違うが、園や小学校に少しずつ積み上がってきていることが感じられる。

前年度公開保育や連携活動を経験してきた子ども達（1年生）の状況を聞くと「どの子どもも連携活動を通し学校というものを経験してくるので、昔に比べて不安感がないように感じる」「学校を嫌がる子がいない」といった声が聞かれた。

連携活動の内容については、変化が感じられ、担任が考えていた計画ではなく、「子ども達からこんなことをしたいとの声があがり、自分たちで話し合いをして計画を立てた」「1組と2組と内容は同じだが、それぞれにやり方が違い、子ども達が主体的に取り組む姿が見られた」「失敗させないように事前に練習をさせてしまうが、練習はいらぬのかもしれないと反省している。失敗して困った時にどうするかも大事と気付いた。」といった教員の意見が聞かれた。

1年生の様子は「昨年よりも（5歳児との）距離が近くなっている」「昨年のことを覚えていて、自分達がしてもらったことを5歳児に返している」など、連携活動の経験がいかされていることがわかる。計画以外にも子どもも発信からはじまった連携活動や生活科以外にも給食の試食や食育といった連携もされている様子もうかがえ、保幼小連携が前進していることが感じられた。

課題

○参加について

研修等への参加の割合からも見ても、私立幼稚園や小・中学校の乳幼児教育に関する関心と理解を高めることが課題と言える。参加しやすい日時の設定や代替保育者等の人材確保が必要である。また、園内研修においても、保育所・幼稚園ともに保育者が集まることが難しいといった園の多忙さや人員不足等、根本的な園運営の部分で難しさがあり、質の維持・向上のためには園の体制に支援が必要と言える。

さらに、小学校への聞き取り調査の中でも、保幼小連携に関しては研修もあり、小学校教員の理解は進んできたが、乳幼児教育に関する部分では浸透はしているとはいえない。保幼小連携研修や、各連携協力園・校の連携活動を通じて、互いの教育を見ること、知ることが重要である。研修の内容として、乳幼児教育を知る、見る機会を増やしていくことも必要である。

○研修方法について

対象を経験年数等で分けることや内容を合致させること、また、同じメンバーで複数回実施することは、同僚性を築くことができ、長期的に人材を育成することにもつながると考える。保育者人材育成のための方針を作成し、経験年数に応じて研修を体系化し、乳幼児教育の質を維持・向上させていく仕組みを作る必要がある。

（6）評価

取組

2年目には、前年度公開保育・授業を実施した園・校や就学先を対象に、公開保育等で保育者が学んだことにより、子どもや保護者にどんな変化が見られたか、また、保幼小の連携活動を経験した子どもや教員にどんな変化が見られたか等を聞き取り調査しまとめた。

3年目には、乳幼児教育の質向上研修の公開保育を実施した園（平成 28、29 年度）の保護者に対して、公開前と比較して保育の変化や子どもの変化等をアンケート調査した。

【聞き取り調査】

対象：小学校 4 私立幼稚園 2 私立保育所 1 の園・校長または教頭、主任、5 歳児・1 年生の担任

※平成 28 年度 公開保育・授業を実施した園・校や就学先を対象に抜粋

実施方法：公開保育等で保育が変化したことにより、子どもや保護者にどんな変化が見られたか、今までの 5 歳児や 1 年生との違いはあるのか、また、保幼小の連携活動を経験してきた子どもや教員にどんな変化が見られたか等を、園校へ訪問し、聞き取り調査を実施。

【保護者アンケート調査】

私立保育園：1 園

私立幼稚園：1 園

公立保育所：1 所

期間：平成 30 年 12 月 10 日～21 日

対象：さくら保育園 3～5 歳児クラス保護者（平成 28 年度公開保育実施）
うみべのもり保育所 3～5 歳児クラス保護者（平成 28、29 年度公開保育実施）
中舞鶴幼稚園 3～5 歳児クラス保護者（平成 29 年度公開保育実施）

目的：公開保育実施園の保育や子どもの変化等を保護者へのアンケートを通じて調査する

回収率：さくら保育所（34%） うみべのもり保育所（25%） 中舞鶴幼稚園（56%）

回収方法：園から保護者宛に配布、園において回収

内容：各園の特徴的な取り組みに合わせた質問とする

- ・さくら保育園、中舞鶴幼稚園⇒保育全体の変化について
- ・うみべのもり保育所⇒ドキュメンテーションや保育について

アンケートの回収率は、保育所と幼稚園では差があると言えるが、仕事をしている保護者が時間を割いて協力していただけただけのことを加味すると、数字だけでは判断できない部分もあると考える。

成 果

【聞き取り調査】

○保育者より

「保育者が変わることで、子どもが変わる、持っている力を出せる」と実感しているとの意見が聞かれた。「保育者が、子どもの思いに気づいてあげたいと思うことで言葉かけも増え、子どもの言葉、子ども同士の会話も増えた。子ども達は、保育者の問いかけに答えようとするので一生懸命考えるようになり、図鑑で調べ、友だち同士教え合う姿も見られるようになった。友だちと協力して納得するまで調べ、そんな友だちの姿を見て、図鑑に興味を持ち始めた子どももいる。」といった変化が聞かれた。懇談会など子ども達の様子を伝えると、「子どもの言っていることがわかった」との声が聞かれ、子ども達が園での様子を話したり、自分達で調べたことを保護者にも伝えたりしていることが伺えた。

○教員より

公開保育や連携活動を経験してきた子ども達の状況を聞くと、「どの子どもも連携活動を通し、学校というものを経験してくるので、昔に比べて不安感がないように感じる」「学校を嫌がる子がいない」といった声をどの学校でも聞くことができた。市全体で取り組んでいる成果と言える。

また、連携活動の内容は、どの学校でも変化が感じられた。担任が考えていた計画ではなく、「子ども達から〇〇したいとの声があり、自分たちで話し合っ計画を立てた。内容は同じでも、1 組と 2 組とやり方が違い、それぞれ子ども達が主体的に取り組む姿が見られた。」「失敗させないようにと、つい事前に練習をさせてしまうが、練習はいらぬのかもしれないと反省している。失敗して困った時にどうするかも大事と気付いた。」といった教員の声も聞かれた。

1 年生と 5 歳児の様子は「昨年よりも（5 歳児との）距離が近くなっている」「昨年のことを覚えていて、自分達がしてもらったことを 5 歳児にしている」など、連携活動の経験が活かされていることもわかった。また、当初の計画以外にも子ども発信からはじまった連携活動や生活科以外にも給食の試食や食育といった連携もされている様子も伺え、保幼小連携の効果は感じられた。

○効果と課題

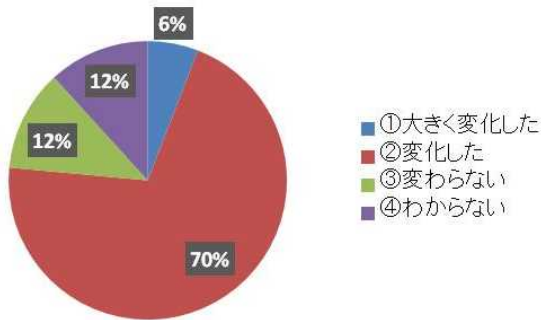
公開保育後の変化は、保育所・幼稚園の保育者や子どもにはあったと言えるが、小学校の教員からは把握することが難しかった。それは、本市の傾向として（過疎地域以外）、1 校に複数園から入学してくる傾向があり、乳幼児教育の変化が即座に見えにくいことも考えられる。また、聞き取り調査の対象とした教員は、1 年生の担任ということもあり連携活動は経験していても、乳幼児教育の経験はなく、どうしても連携活動の内容に終始してしまう傾向にあった。つまり、5 歳児と連携活動をしている教員でさえ、まだまだ乳幼児教育を十分に理解できていないとは言えない。今後は、乳幼児教育について理解を深めるための研修や発信が必要である。

【保護者アンケート調査】

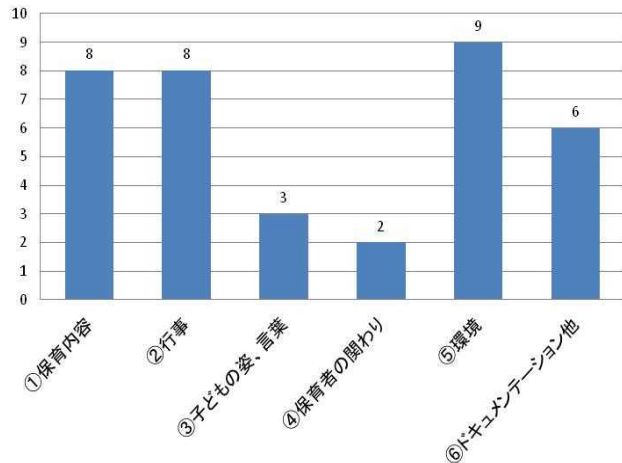
さくら保育園

○保育の変化について

以前と比べて変化したと感ずるか



特に変化したと感じたところはどこですか？



グラフのとおり①大きく変化した②変化したを合わせると約 8 割が変化を感じたと回答している。また、変化したと感ずる内容を選択する問い（複数回答可）では、⑤環境や②行事といった保護者にとっても見えやすい部分の回答が多かった。しかし、①保育内容といった回答も多く、日々の保育は保護者には見えにくい部分であるがゆえに、ドキュメンテーション等での可視化の効果が出ているとも言える。

保育や子どもの姿（自由記述）についても、先生中心ではなく、子ども中心にした保育に変わってきた、子どもの考える力や協力する力がつきた、子どもの意見を大切に、行事や作品にいかし、先生と子どもがアイデアを出し合ってチャレンジしている、子どもも意欲的になったといった記述があった。

以上のことから、公開保育後も、保護者の理解を得ながら、保育者中心ではなく、子どもを中心とした保育へと変革させてきていることが伺える。特に、行事については、保護者の理解が不可欠であり、可視化による保護者への発信が大きな役割を果たしていると言える。何より、子どもが変わってきたということが、保護者の理解につながっていると言える。

うみべのもり保育所

○ドキュメンテーションについて（自由記述）

- ・ものや人とのように関わって遊んでいるのか見ている。子どもたちのつぶやき、それに対して保育士の方の言葉かけのやりとりも楽しみにしている。最後までいきつかなくても子どもたちの？やなぜ？が続いていく様子がよく分かる、どうなったのかな？と我が子に聞くこともできる。
- ・家庭での親対子だけでは見えない子どもの成長がよくわかる。心や体の成長段階の説明や、先生方の声かけなども書いておられるので、自分の育児をふり返ってとても参考になる。他の保護者の方とも、（ドキュメンテーションをよく読まれる方は）ドキュメンテーションの内容で会話をすることがよくあり、改めて子どもたちの成長を喜んでいる。

○保育について

- ・1人の子が発したことをクラスで共有して発展させたり、関連を持たせて違うことをしてみたり、1人よがりにならず、全体で共有し、同じテーマでも個々に気付くこと、気になることが違い、それを突き詰めていたり、それもまたみんなでも共有したりと、まとまって活動しているのがよくわかる。
- ・今までのように、大人（先生）から指示出しはしないと聞いていたが、日々の子どもの発信や行動を上手く拾って、子ども主体で活動していることを実感。見守る、でも必要ところはさり気なくサポート、先生方はつかず離れず接しているのがありがたい。親も見習いたいが、厳しくなりがち。

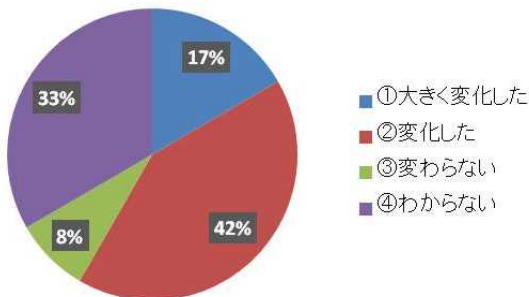
○子どもの姿、エピソード

- ・いつも遊びに目的があるように話している。「今日は～するんや。〇日にはっぴょうがあるから」や「今、〇〇作っとるんやで。あと、作ったら完成なんや。頑張らんと」など、充実した毎日を過ごしている。
- 保育の可視化のひとつでもあるドキュメンテーションが、子どもとの会話、保護者同士の会話の糸口にもなり、保育者の子どもへの言葉かけややりとり、発達に関する記述が子育ての参考にもなっていることが伺える。また、1人の子の興味・関心から、クラス全体で共有し、広がっていく保育や、保育者の指示ではなく、子どもを主体にしながらも、保育者の教育的意図やサポートを知ってもらう機会になっており、保育への理解につながっていることが伺える。
- 保育を可視化することは、保護者に子育てや保育への理解を促す、親子だけでなく、保護者同士も結びつける効果もあると言える。

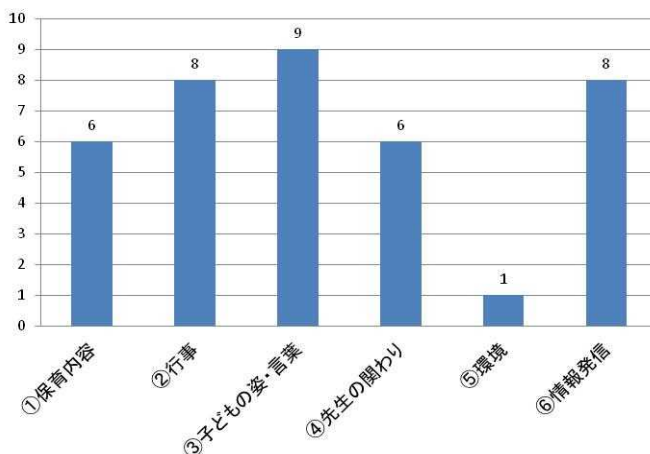
中舞鶴幼稚園

○保育の変化について

以前と比べて変化したか



特に変化したと感じたところはどこですか？



グラフのとおり、①大きく変化した②変化したを合わせると約 7 割が変化を感じたと回答している。また、変化したと感じる内容を選択する問い（複数回答可）では、②行事や③子どもの変化・姿といった回答が多く、自由記述の中でも同様の記述が見られた。私立幼稚園は、園の独自性や特色をいかした教育が求められており、行事を変えていくことそのものが難しい中、保護者の理解を得ながら、子どもの主体性を尊重した内容へと変革していることが伺える。また、⑥情報発信との回答が多いことから、保育の可視化としておたよりを活用し、保護者へ発信している効果も感じられた。⑤環境については、園バス利用者が多いこともあり、保護者が見る機会が少なかったことも影響しているのではないかと考えられる。

保育に関する自由記述には、言葉で教えるのではなく、自ら体験し、五感で感じることを大切にしている、先生がお手本を見せ、させるという保育から、子どもたちに考えさせる保育へ変化しているといった内容が見られた。ドキュメンテーション（おたより）についても、この遊びから違う遊びに変わっていく様子など子どもたちが自分たちで考え、視野が広がっていく様子などが具体的に写真や文にして載せてありわかりやすい、子育てに関わる親のためになる情報も載せてくれているのが参考になる、行事の目的も書かれているのでわかりやすい、といった記述が見られた。

以上のことから、公開保育後も、子どもを主体とし、様々な体験を通して、自分で考え、試す、工夫する、話し合うなどの幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識した保育へと変革させ、その様子をドキュメンテーション（おたより）として可視化し、保護者に発信している効果が記述内容からも伺える。

以上、3 園の保護者アンケート調査から、公開保育をきっかけに保育者中心の保育から、子どもを主体とした保育へと変化した様子が、保護者を通して園の保育や子どもの姿などから見られ、さらに、ドキュメンテーション等の可視化を通じて、保護者の理解を得ていることがわかる。保育が変わる、子どもが変わる、保護者も変わる、という循環の要は保育者であり、専門職として公開保育等を通じて学び続けることが保育の質を高めていくことにつながると言える。

課題

今回の聞き取りにおいて「自然物で遊んだ経験のある子と全くない子の差が大きい」など、保育所・幼稚園で経験してくる内容に差があることもわかった。このような経験の差が少なくなるように更に乳幼児教育ビジョンにもとづいて質の高い乳幼児教育を推進していく必要がある。

連携活動については、小学校の担当者が変わったとしても、5 歳児で経験している子どもたち自身が自ら連携活動を進歩させているようにも感じられた。保幼小連携は、その中身の充実が課題となっていることから、やりたいことを自ら発信する 1 年生に教員がどこまで寄り添い、任せられるかが問われている。

また、保育の変化、子どもの変化は、保護者アンケートの中から見とることはできたが、効果そのものを評価することは難しいと感じる。

(7) 保幼小接続カリキュラム研究・策定

取組

保幼小連携を継続・充実させていくために、保幼小接続カリキュラムを策定することとなり、その検討、意見交換を行う会議（当初：大学教授、公私保育所・幼稚園の園長・保育者、小学校長・教員 の代表者）：保幼小接続カリキュラム策定会議を設置し、3 年間かけて策定に取り組んだ。

1 年目は、5 歳児から小学校 1 年生の接続期を対象とした保幼小接続カリキュラムの研究としていたが、議論を進めていく中で、接続期だけのカリキュラムでは不十分であり、本市の教育振興大綱の基本理念でもある「0 歳から 15 歳までの切れ目ない質の高い教育の充実」を実現するべく、0 歳から 15 歳までを見通したカリキュラムを策定することとなった。そのため、2 年目からは、策定会議に新たに中学校長、教員代表 1 名ずつを加え、舞鶴らしい、オリジナルなカリキュラムを策定するべく、0 歳から 15 歳までの各保育所・幼稚園、小・中学校の事例を収集し、検討してきた。

3 年目には、「乳幼児教育ビジョン」「小中一貫教育」を「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」でつなぐ「保幼小接続カリキュラム～まいつるカリキュラム 015」を策定し、保幼小連携中研修を通じて周知を図った。

平成 28 年度：保幼小連携等に関する研修、意見交換

平成 29 年度：保育所・幼稚園、小・中学校の事例収集と検討
 平成 30 年度：事例検討、様々な連携について議論 カリキュラム策定
 策定会議：年 3～4 回開催
 保幼小中連携研修：年 1 回開催

成 果

3 年間の策定会議の中で、講義を受けたり、事例を検討したり、意見交換したりすることで相互の理解が深まってきたことは大きな成果である。

○保幼小中接続策定会議

策定会議のメンバーが、事例収集のために公開保育や連携活動、小・中学校の授業に視察に行くことで、互いの教育の方法の違いや良さ、年齢は違っても同じ学びがあることに気付き、事例を収集するという目的だけではなく大きな意味があったと言える。

メンバーからは「意欲や探求という点では保育も授業も同じと感じた」「保育所・幼稚園に行き勉強になった。発見したり、発想したり、試行錯誤したり、主体性を引き出す保育や授業が大切と感じた」「主体的・対話的で深い学びの授業がどのようなものかわかった」といった感想がよせられ、保幼小中連携を進める第一歩は互いを見ることと感じた。

事例の検討についても「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を取り入れて話し合ってきた。その話し合いそのものも保育の検討であり、メンバーからは「事例をもとに保育や授業を語り、議論することが楽しかった。参加できてよかった。」といった感想が聞かれ、語り合うことの効果も感じられた。

○「保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム 015」の内容

0 歳から 5 歳の『乳幼児教育ビジョン』をスタートとして、6 歳から 15 歳までの『小中一貫カリキュラム』へとつなぎ、0～15 歳までを「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の視点で捉え、貫いていることも大きな特徴となった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5 歳児の終わりから見られる姿とされているが、内容的には 5 歳児以降にも必要な資質・能力であると考え、0 歳から 15 歳の子どもの姿を「育てたい 10 の姿」の視点で捉えることとし、「10 の姿」を保育者や教員の共通言語として理解を深めていくことにつながった。また、0 歳から 15 歳までの各園校の舞鶴の豊かな自然をいかした遊びや体験、授業の実践から事例を収集・検討していることから、舞鶴らしいオリジナルのカリキュラムとなっている。

保幼小中接続カリキュラムとして 0 歳から 15 歳までをどのようにつなぐかもカリキュラムの中で具体的に明記している。特に、保育所、幼稚園から送付される指導（保育）要録には一人一人の育ちや学びの軌跡が書かれており、その様式や書き方や活用方法については、統一されていなかったことから、本カリキュラムを通じて統一することとした。

平成 31 年度には、幼保連携型認定こども園が市内にできることから、市内のすべての乳幼児教育施設において、要録に関しては同様に取り扱うこととした。連携協力園・校での連携活動についても、カリキュラムとして年間を通じて活動がつながるように連携活動年間計画の様式も統一することとなった。

その他にも、支援の必要な子どもの育ちをつなぐため、個別の支援計画等の活用についても議論し、明記した。

○保幼小中連携研修

年に 1 度ではあるが、保育所・幼稚園・小学校・中学校の保育者・教員と一緒に学ぶ貴重な場となっている。互いの保育・教育を知る機会として、保育所保育指針や幼稚園養育要領、学習指導要領に関する内容を中心に実施した。3 年目には、「保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム 015～」を周知する機会にもなった。

課 題

策定して終わりではなく、活用していくことが重要であることから、研修等を通じて周知・啓発していく。また、0 歳から 15 歳までの事例は年々増やしていき、充実させていきたいと考えており、事例を検討し増やしていくための仕組みを作っていくことも課題である。

（8）乳幼児教育フォーラム

取 組

事業の成果等を周知・啓発するために、1 年目は、市内の保育所・幼稚園、小・中学校等に案内し、事業全体の報告会を実施した。2 年目には、更なる周知・啓発のため、近隣府県市町の行政や関係機関、受託自治体等に案内し、「乳幼児教育フォーラム」と称し、事業の報告会と講演会等を実施した。

3 年目には環太平洋乳幼児教育学会日本支部と共催し、舞鶴市乳幼児教育センター開設記念と事業全体を総括する報告会を兼ねて実施した。その前日には、市内 3 園の公開保育と保幼小中連携研修（保幼小中接続カリキュラムの周知を図る）を実施し、当日は、講演と報告会、乳幼児教育に関するシンポジウム等を実施した。

乳幼児教育フォーラム：2 回（平成 29、30 年度）

成 果

○乳幼児教育フォーラム

I 部 講演

II 部 事業報告会、シンポジウム

事業報告会では、公開保育・授業を実施した保育者・教員の代表が報告する形式をとっており、公開保育・授業やカンファレンス等で学んだことや公開後の様子を現場の保育者・教員が直接語ることで、振り返りにもなり、参加者の学びや意欲にもつながっている。また、大学の研究者から公開保育・授業の意義や成果を評価していただくことにより、さらに自信や専門職としての意識も高まるように感じる。

【参加者アンケートより】

・公開保育の報告を聞いて、どの園も「やってよかった」「学びがたくさんあった」と報告しておられたのが印象的だった。公開保育前ははどうしたらいいか、これでいいか、私自身もすごく悩んでいたが、やはりやってよかったという感想はあったので、他園

の報告もすごく学びにつながった。

- ・公開保育が「できる、できない」ではなく、「するか、しないか」、それは公開保育だけでなく全てのことに言えると感じた。
- ・子ども達が主体的に遊べる環境を作るために「できる、できない」と言い合う議論より、何をするか、どのように作っていくかを考え、話し合っていくことが大切だということ学んだ。
- ・皆さん頑張っておられるなど感じ、「自園も！私も！」と励みになった。
- ・「ドキュメンテーション研修」を通して、子どもの育ちを見とる力を保育者一人一人がつけていくことが大切であると思った。園内研修を行っていきたい。
- ・各保育園・幼稚園の公開保育の内容を知ることができてよかった。公開保育で第三者に見てもらふことの大切さ、保育や環境の見直し、子ども達が今どんなことに興味を持っているのかを常に考え、保育を発展していくことの重要性を改めて感じた。
- ・どの園も色々な状況の中（人数、職員数、地域など）、様々な努力をされ、子どもの育ちを大切に保育されていると分かった。保護者としてもできる限り、協力していけたらと思えるフォーラムだった。
- ・ドキュメンテーションを書いていることで、見る目が育つと言われたが、日々の記録を書き、また、他の保育者のドキュメンテーションを見ることで子どもの育ちや学びを実感できていることを改めて感じた。自分の力になっていることを講師の言葉から実感して、自分の喜びにもなった。

(市外の参加者)

- ・どの地域でもどの園でもできるということが印象的だった。このシンポジウムで得た学びを「よかった、よかった」と終わらせるのではなく、これからどう具体的に実践にいかしていくかが重要であると思った。
- ・舞鶴市の取り組みを参考にさせていただいている。幼保の研修の取り組み、市の組織、幼保小中の取り組み全てを関係機関に知らせていきたいと思う。
- ・自分の市では「できない」ではなく、できることから始められるように研修・公開保育の充実等を図っていききたいと思う。

このように、本市の取り組みと事業趣旨について広く周知を図ることができた。

○特別企画：公開保育

乳幼児教育フォーラムの特別企画として、「乳幼児教育の質の向上研修」における公私・園種を越えて保育者が共に学び合う公開保育・カンファレンスを市内外の参加者に体験していただく機会として、さくら保育園・中保育所・舞鶴幼稚園において実施した。参加者のアンケートからは、保育を見るだけで終わらず、カンファレンスに参加することで理解を深めることになると感じた、公開園の実践者と参加者との交流も大切といった内容の感想が聞かれ、公開保育の実践者と参加者が共に保育について語り合い、学びを深めることの効果を体験する機会となった。

【参加者アンケートより】

さくら保育園

- ・子ども達が遊んでいる姿や考えたことなども展示してあることで、大人だけでなく、子ども達にとっても他の子の遊び方や考えが共有できる大切なドキュメンテーションになっていると感じた。
 - ・保育内容や理解の発信の仕方がとても勉強になった。
 - ・それぞれのクラスで子どもの主体性が見られてよかった。「〇〇だから〇〇しよう」と自分達で考えたり、一生懸命遊びを進めたりする姿を普段から認めてもらっているからこそ、自信を持った姿につながっているのだと感じた。
 - ・（保育者が）子どもの言葉や思いを大切にされ、寄り添われている姿、言葉かけも優しく、受容的だと思った。
 - ・子ども達の気付きや言葉をととても大事にしておられるなど感じた。子どもと一緒に考えるということがどれだけ大事か、応答的な関わりを大事にしたいと思った。
 - ・どのクラスも空間の使い方をすごく工夫されているのがわかった。特に4歳や3歳クラスのお店屋さんごっこでは、素材なども工夫されていて、子ども達も本当に楽しそうだった。乳児クラスではゆったりとした雰囲気、心地良さがこちらまで伝わってきた。
 - ・遊び場の工夫や道具についてもより発展していくような配慮があり、勉強になった。
- といった感想が聞かれた。

○特別企画：保幼小中連携研修

乳幼児教育フォーラム 特別企画としても保幼小中連携研修会を開催し、市内外の保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・中学校の保育者・教員、大学・行政関係者等に、「舞鶴市保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム015～」について、その特徴や事例等説明し、周知を図った。

参加者アンケートからは、「保幼小中接続カリキュラム策定の趣旨について、しっかりとまとめてあるので、なぜ必要なのか考えることができた。切れ目ない質の高い教育を目指して、5歳児～小学1年生だけでなく、もっと長い目でつなげていくことが大切だとわかった。」「つながりを持った（つながりがある）学びをしていくには、互いの教育（保育）について知っていかないといけないと改めて実感した。」という感想が聞かれた。しかし、「接続カリキュラムと小学校、中学校のカリキュラムのつなぎを更に深めるにはどうすればいいか。」「保育者としては、事例を読んでもわかりやすいと感じたが、（小学校）高学年担当の先生方は乳幼児期の大切さを理解してくださっているのだろうかと思う。」「カリキュラム015」をどのように活用できるか、まだまだ自分の中に落とし込めていない。これからの課題だと感じている。」といった不安の言葉も聞かれ、カリキュラムをどのように活用していくのかについては検討の必要があり、今後の課題とも言える。

また、市外の参加者アンケートからは、「保育所、幼稚園の先生と中学校の先生が一緒の場で話し合っ作り上げられたということが素晴らしいと思った。中学校の先生が保、幼の事例を見れる、保、幼の先生が中学校の事例を見れるというカリキュラムになっていて、0歳から15歳までの学びのつながりがわかりやすく、捉えやすいと思った。」「0歳から15歳までの姿を“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”の視点で捉えるという特徴をみて、幼小連携のさらに先へつなげるカリキュラムの形を用いるという考え方が興味深かった。」といった意見が聞かれ、保育所・幼稚園、小・中学校の保育者・教員が共に学ぶ研修についても周知する機会となった。

課題

講演会、報告会等を今後も継続し、市内の保育所・幼稚園、小・中学校の保育者・教員が共に学ぶ機会を企画する必要がある。

(9) その他

取組

乳幼児教育の質向上研修への参加を促し、保育者の質の維持、向上に努めるため、22日から本研修を「保育士等キャリアアップ研修」に位置づけた。また、33日には私立幼稚園協会の保育者としての資質向上研修俯瞰図の研修に位置付け、幼稚園教諭の参加につながるよう取り組んだ。

事業の成果等の周知・啓発のため、視察の受け入れや学会・研究会において発表、報告を行った。

- 視察、調査受け入れ：20回
- 雑誌掲載：6回
- 学会、研究会での発表、報告：6回

成果

乳幼児教育の質の向上研修を「保育士等キャリアアップ研修」と私立幼稚園協会の保育者としての資質向上研修俯瞰図の研修に位置づけたことで、市外に出なくても研修が受けられることとなり、園にとっても保育者にとっても負担の軽減になり、研修に参加するメリットができた。

他市からの視察では、園見学の希望もあり、公私の保育所で受け入れをし、事業説明を担当課が担っている。市の事業として、公私・園校種を越えての公開保育や研修に取り組んでいることやその方法等への関心が高い。

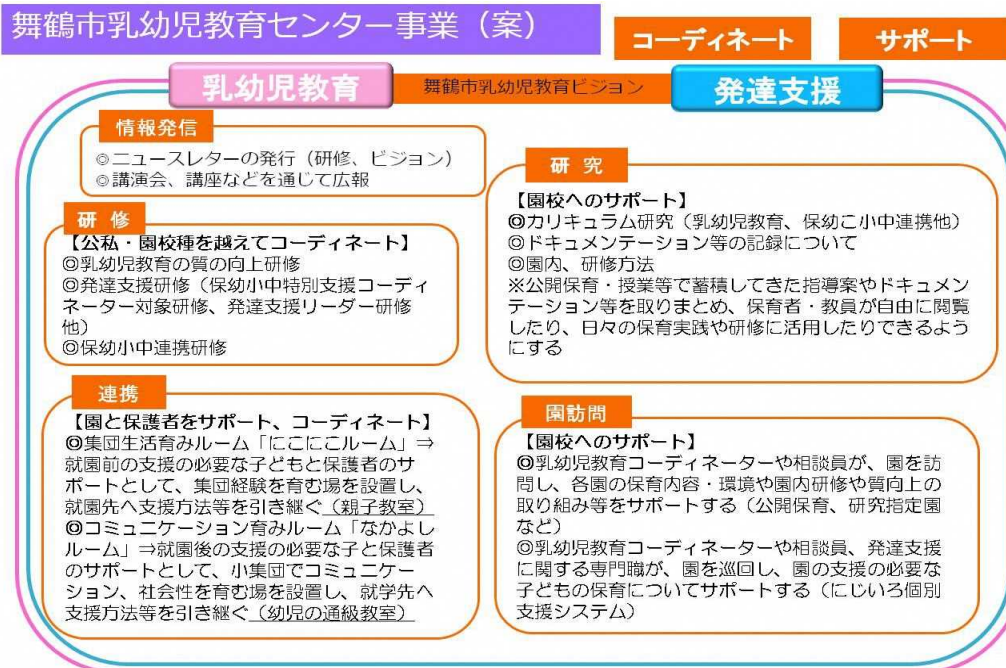
課題

乳幼児教育センターで実施する研修と保育士等キャリアアップ研修、その他法定研修等様々な研修を体系化し、実施していく必要がある。

5. 事業終了後の展望

○平成31年度開設の乳幼児教育センターの機能と役割の概要

「乳幼児教育ビジョン」に基づき、『乳幼児教育』『発達支援』の分野において「サポート」「コーディネート」し、「情報発信」「研究」「研修」「連携」「園訪問」を実施する。

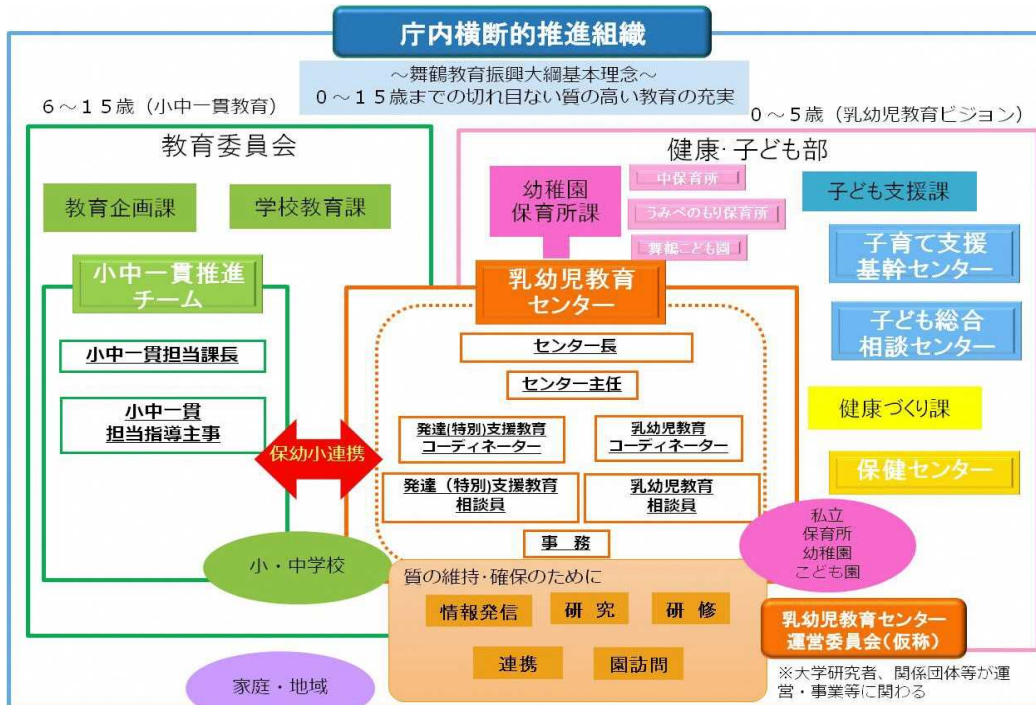


『乳幼児教育』の分野では、大学研究者の指導を受けながら、「子どもを主体とした保育」「保幼小連携」等について、「公開保育・授業」を中心に公私・園校種を越えて共に学ぶ「乳幼児教育の質の向上研修」を引き続き実施する（研修）。研究指定園や効果的な研修方法についても公私の園と共に研究を進め、公開保育・授業等で蓄積してきた指導案やドキュメンテーションをセンターで取りまとめ、保育者・教員が自由に閲覧したり、日々の保育実践や研修に活用したりできるようにする（研究・情報発信・サポート）。「保幼小中接続カリキュラム～まいつるカリキュラム015～」の事例研究を進め、事例を追加、更新していく（研究・連携）。

『発達支援』の分野では、園・校への巡回（サポート）と発達支援に関する研修（研修）を実施する。また、就園前の支援の必要な子と保護者の支援として集団生活育み場（サポート）を設置・運営し、就園先へ支援方法等を引き継ぐ役割を担う（連携、コーディネート）。就園後も社会性やコミュニケーションに支援の必要な子と、保護者への支援として、小集団で社会性やコミュニケーションを育む場（サポート）を設置・運営し、就学先に引き継いでいく役割を担う（連携、コーディネート）。

研修内容や乳幼児教育ビジョンを広く周知するために、ニュースレターの発行や報告会は引き続き実施する。

乳幼児教育センターで実施する研修と保育士等キャリアアップ研修、その他法定研修等様々な研修を体系化し、実施していく。また、本市の人材（保育者）育成方針を作成し、それに準じて経験年数に応じた研修等への参加を促していく。また、保幼小連携の推進、保幼小中接続カリキュラム研究、保幼小中連携研修については、教育委員会と連携して進める。



・より多くの関係者が関わることにより、市民全体の乳幼児教育センターとなれるよう、その運営や事業の内容等を決定していく運営委員会（仮称）を設置し、体制を構築していく。

・園の質を維持・向上させるために、研修等の企画に参加し、グループワークのファシリテーターを経験する等して、園の保育リーダー、園のアドバイザーを育成する。